連歌の「詠み方」と「読み方」

――宗祇一座『水無瀬三吟』『湯山三吟』を矩として

光田和伸

二人以上、複数の作者たちが交互に作品を続けて完成させる連歌は、日本の中世社会において高度に発達して、時代を代表する文学となった。しかし、近世に入って、その大衆普及型ともいうべき俳諧（連句と通称される）に押されて衰える。近代の明治中期からは連歌俳諧ともに、日常的には制作されなくなった。

現在、日本古典文学のアンソロジーの類において、連歌には一冊が割り当てられることはあっても、その巻の売れゆきは、おそらくはかばかしいものではない。かつて、大衆こぞって連歌に熱中した中世の状況とはおおいに隔たってしまっている。

私自身が、こうしたアンソロジーの連歌関係書の執筆者のひとりであるから、あえて言うのだが、このような現在の状況を打破できないでいる原因は、連歌研究者の側にもある。連歌は文芸作品であるが、その反面で、網の目のように張りめぐらされたルールに従って言葉を選びだし組み立てるという、言語ゲームの性格も持っている。ところが、連歌研究者、連歌解説書の執筆者が、そのルールを知悉しているとは、とうてい言いがたい。

ルールを知らない解説者がゲームを「解説」したとして、その説明は、面白くはないだろう。先ず、ルールを明確に提示しなければならない。そう考えて、私は先年、「連歌新式の世界」を発表した（「国語国文」一九九六年五月号）。そこにおいて私は、この「網の目のように張りめぐらされたルール」の姿を図示することに、ほぼ成功したと考えている。

発表以降の十年において、このルール図に基づいて連歌を理解する試みは次第にひろがってきている。また、二十年ほど前から日本の各地で再興した連歌制作の現場でも、ほぼ、このルール図が参照されている。次に、このルール図の中心部分を掲載する（図1）。

1 部立

【ぶだて　素材の分類】この世の物象事象を、天然界8、人間界8、人間1の17の素材に分類する。さらに、天然界の〔A天〕〔B地〕〔C媒〕〔D飾〕を、それぞれ人間界の〔A天〕〔B地〕〔C媒〕〔D飾〕に照応させて、自然と人事とのあるべき統一の姿を示している。2分割を反復する配置は胎蔵界曼陀羅型である。

【天然界】

A天

①光物　日　朝日　夕日　春日　月　望　三日月　有明　星　流星　昴　星月夜

②時分　【夜】宵　闇　夢　床　【朝】曙　東雲　月入　【夕】暮　入相　月出

B地

⑤山類　〔体〕山　麓　峰　尾上　谷　河　岨　島　坂　炭竈　〔用〕畑　機　滝

⑥水辺　〔体〕海　川　津　浦　島　磯　沢　堤　岸　〔用〕水　波　氷　汐

C媒

③聳物　霞　陽炎　虹　霧　靄　雲　雲の峰　煙　朝煙　夕煙

④降物　雨　五月雨　時雨　露　霜　雪　吹雪　霰　霙　夕立　村雨

D飾

⑦動物　【獣】鹿　牛　馬　犬　【鳥】鶯　時鳥　雁　【虫】蝶　松虫　蝙蝠

⑧植物　【木】花　梅　松　柳　【草】芹　撫子　尾花　【竹】笹　篠　笋

【人間】

⑨人倫　君　我　汝　人　父　母　誰　彼　主　某　友　仇　姿　身　防人　関守　渡し守

A天

⑯神祇　神　宮　社　御前　祭　玉垣　神子　相撲　小忌衣　柏手　放生

⑰釈教　仏　寺　御法　経　法師　僧　尼　出家　心の月　袈裟　庫裏

B地

⑫旅　草枕　旅衣　旅路　舎　田舎渡り　都を思ふ　海路　渡舟

⑬名所　【山の】富士山　双ヶ岡　【水の】由良門　琵琶湖　【所の】志賀の古里

C媒

⑭恋　契　縁　妖　背　玉章　乱髪　後朝　辛き　独　睦語　私語　兼語

⑮述懐　【述懐】世　親子　命　【懐旧】昔　いにしへ　【哀傷】無常　亡き人

D飾

⑩居所　〔体〕里　家　宿　屋　門　戸　籬　窓　樞　〔用〕外面　庭　小簾

⑪衣裳　衣　袖　袂　衿　袴　浴衣　下紐　絹　麻　錦　綾　褸　鶉衣

2 句数

【くかず　連続使用可能数】部立ての17の素材に四季の4を加え、都合21の素材の連続使用可能数を定める。◎は連続使用が義務づけられている数。Ⅰの3素材にのみ存在する規定。〔本歌本説〕を素材として扱うばあい、もとⅡ型、後にⅢ型となる。句数の区分は、3を分割の基本数としており、従って配置は金剛界曼陀羅型。

図1　ルール図

3句去

【くさり　再使用までの待ち数】下位区分のある素材は、同一区分相互5句去り、異区分は相互3句去りが原則。一部に2句去りあり。＊印は別に考えるべきもの。述懐の3区分は句去りには関係しない。○下位区分のない部立ては、天然界の天と媒にかかわる3素材のみ3句去り。これ以外は5句去り。　○季と人倫は別立て。

	Ⅰ 5句まで	Ⅱ 3句まで	Ⅲ 2句まで
勅撰集部立て①	春 秋 恋 ◎◎◎ ◎◎◎ ◎◎◎ ○○○ ○○○		
勅撰集部立て②		夏 冬 述懷 ○○○ ○○○ ○○○ 神祇 釈教 旅 ○○○ ○○○ ○○○	
私撰集部立て①		山類 水辺 居所 ○○○ ○○○ ○○○	
私撰集部立て②			光物 時分 人倫 ○○○ ○○○ 聳物 降物 名所 ○○○ ○○○ 動物 植物 衣裳 ○○○ ○○○

Ⅰ 下位区分のない部立て

天然界 天媒

	光	聳	降
光	3		
聳		3	
降			3

天然界 地　人間界 天媒地飾

	山	水	神	釈	恋	述	旅	居	衣
山	5								
水		5							
神			5						
釈				5					
恋					5				
述						5			
旅							5		
居								5	
衣									5

○三句去りは　光物　聳物　降物

○五句去りは　山類　神祇　水辺　釈教　恋　述懷　旅　居所　衣裳

Ⅱ 下位区分のある部立て

時分

	夕	朝	夜
夜	3	3	5
朝	2	5	3
夕	5	2	3

名所

	山	水	居
山	3	3	5
水	3	5	3
居	＊	3	3

動物

	獣	鳥	虫
獣	3	3	5
鳥	3	5	3
虫	5	3	3

植物

	木	草	竹
木	3	5	2
草	3	5	2
竹	2	2	＊

Ⅲ 季

	春	夏	秋	冬
春	7			
夏		7		
秋			7	
冬				7

Ⅳ 人倫

	人
人	2

【百韻 世吉 連歌首尾 用】

連歌新式による式目の図　©光田 和伸2007

この図は十四世紀半ばに二條良基によって制定され、その後、数度にわたって改訂増補された「連歌新式」のルールを解析して、図示したものである。

「連歌新式」の定めるところは連歌のルールの基本を「部立て」「句数」「句去り」の三本立てとする。「部立て」は使用素材の分類であり、自然と人事を十七に分類し、これらを胎蔵界曼陀羅型に配置し、自然と人事とを照応させる。「句数」は素材ごとに定める、連続使用可能数であって、「部立て」の十七素材を中心に、四季四を加えて、これを金剛界曼陀羅型に再構成する。

この、「部立て」「句数」において配置される素材語彙が、それぞれ胎蔵界、金剛界の両界曼陀羅を構成しているという考え方は極めて重要である。この世の素材、「もの」は、無秩序にころがっているわけではない。「もの」すなわち「ことば」は、大日如来という仏を中心とする世界秩序から授かって、表現にあずかっているのだ。もとより、中世では「神」も仏のあらわれ方の一つである。

「部立て」においては、天然界と人間界とが照応しているという考え方が見られることも注目される。ひとの生活と心は、すべて宇宙の反映であって、ひとはそのことに目覚めなければならない。

連歌作品は懐紙に独特の形式で記録される。このルール図を懐紙に取り入れて、図2、図3のような連歌の解析シートを作ることが理解の基本となる。例は「水無瀬三吟」「湯山三吟」初折である。

【①②光物・時分】と【⑯⑰神祇・釈教】は互いに照応する。同じように、【③④聳物・降物】と【⑭⑮恋・述懐】、【⑤⑥山類・水辺】と【⑫⑬旅・名所】、【⑦⑧動物・植物】と【⑩⑪居所・衣装】は、それぞれ照応する素材である。ひとの心の内と外とは、つねに照応している。連歌は、この考え方を基本に、自在に心の内と外とを行き来し、また他者と自己の心を往復する文芸なのである。

正岡子規はかつて、連歌俳諧には統一する主題が存在しないと断じて、したがって連歌俳諧は新時代の文学たるに値しないという趣旨の発言をした。しかし、世界の統一と調和を信頼し、互いの心に自在に出入りして、心と心のつながりを確認しあうことこそ、連歌形式の文芸の「統一主題」なのである。

たとえば、【③④聳物・降物】と【⑭⑮恋・述懐】とが照応しあうという点に注目してみよう。「水無瀬三吟」「湯山三吟」ともに【⑭⑮恋・述懐】を素材として扱う句の前後には、極めて高い確率で、【③④聳物・降物】を素材とする句が配置されていることがわかる。ゲームの流れから言えば、【③④聳物・降物】を素材とする句が作られることは、【⑭⑮恋・述懐】の句への誘いである。また【⑭⑮恋・述懐】の句のシリーズを終わりは【③④聳物・降物】の句をだせば、一同みな、心やすらかに納得するということになる。「雨・雪・霧・煙」と「恋・つらさ」との照応は「雨の慕情」「なごり雪」「夜霧のしのび逢い」など、現代の歌謡にも見られる。

図2 水無瀬三吟 初折

初折 表

長享二年正月二十六日
後鳥羽院御影堂奉納三吟
賦何人連歌

句数	句去	花月	季	句	作者	物分	物名	人	所	衣	恋	述懐	神祇
1	1	春	春	雪ながら山もとかすむ夕かな	宗祇	夕	霞						
2	2	春	春	行く水とほく梅にほふ里	肖柏		水		梅	里			
3	3	春	春	川かぜに一むら柳春みえて	宗長		水		木				
4	4	秋	秋	舟さすおとはしるき明がた	宗祇	暁	水						
5	5	月	秋	月は猶霧わたる夜にのこるらん	肖柏	夜	霧						
6	6	秋	秋	霜おく野はら秋はくれけり	宗長	*	降						
7	7	秋	秋	なく虫の心ともなく草かれて	宗祇				草				
8	8			垣ねをとへばあらはなる道	肖柏					屋			
9	9	花	春	山ふかき里やあらしに送るらん	宗長								
10	10	春	春	なれぬ住居ぞさびしさもうき	宗祇					居			
11	11			今更にひとりある身を思ふなよ	肖柏			人					
12	12			うつろはむとはかねてしらずや	宗長								
13	13	春	春	置きわぶる露こそ花に哀れなれ	宗祇		露		木			*	
14	14	春	春	まだのこる日のうちかすむかげ	肖柏	夕	影						
15	15	春	春	暮れぬとや鳴きつつ鳥のかへるらむ	宗長					鳥			
16	16	春	春	み山をゆけばわく空もなし	宗祇								
17	17	月	冬	はるるまも袖はしぐれの旅衣	肖柏	*	雨			衣	旅		
18	18	月	秋	わが草まくら戸やつさむ	宗長	夜						恋	
19	19	秋	秋	いたづらにあかすよおほく秋更けて	宗祇	夜							
20	20	秋	秋	夢にうらむるをぎの上かぜ	肖柏	夜							
21	21			みしはみなふる郷人の跡もうし	宗長			人	郷			述	
22	22			老のゆくへよなににかからむ	宗祇								

図3 湯山三吟 初折

初折 表

延徳三年一月廿日
於有問湯一座
賦何人連歌

句数	句去	花月	季	句	作者	物分	物名	人	所	衣	恋	述懐	神祇
1	1	冬	冬	薄雪に木の葉色こき山路かな	肖柏								
2	2	冬	冬	岩もとすすき冬やなほみん	宗長		山						
3	3	冬	冬	松むしにさそはれそめし宿出でて	宗祇		虫			屋			
4	4	秋	秋	さ夜ふけけりな袖のあき風	肖柏	夜				夜			
5	5	月	秋	露さむし月もひかりやかはるらん	宗長	夜	降						
6	6			おもひもなれぬ野辺の行く末	宗祇								
7	7			かたらふもはかなの友やたびの空	肖柏			人			旅		
8	8			雲をしるべのみねのはるけさ	宗長						旅		
9	9	花	春	憂きはただ鳥をうらやむ花なれや	宗祇								
10	10	春	春	身をなさばやのあさゆふの春	肖柏	時		人					
11	11			故郷ものこらずきゆる雪をみて	宗長		雪			屋			
12	12			世にこそみちはあらまほしけれ	宗祇								
13	13			なにをかは昔のたもとに恨みまし	肖柏					衣		述	
14	14			すめばやまがつ人もたづぬなし	宗長		*	人					
15	15			名もしらぬ草木のもとに跡しめて	宗祇								
16	16	月	秋	あはれは月になほぞそひゆく	肖柏	夜							
17	17	月	秋	秋の夜もかたるまくらに明けやせん	宗長	夜							
18	18	秋	秋	おもひの露をかけしくやしさ	宗祇		降				恋		
19	19	秋	秋	たがならぬあだのたのみを命にて	肖柏			人			恋		
20	20			さそふつてまつわび人ぞうき	宗長								
21	21			すみはなれいまは程さへ雲去路に	宗祇	*						述	
22	22			いりにしやまよなにかさびしき	肖柏								

ここまでは、素材の分析から宗祇連歌を見てきた。素材のむらのない分散とその配置の調和が、宗祇連歌の特色と言ってよいだろう。次の句にどのような素材を扱うかは、熟達した作者たちには、ほぼ見通せているのであって、あたかも、一流の棋士たちには何十手先までも読めていることに似ている。これはおそらく偶然の一致ではなくて、そもそも十三世紀半ばに連歌本式という新ルールが成立するにあたり、より前代の賦物連歌のルールに、将棋のルールを援用して新ルールを工夫したと思われるふしがある。また、先に「網の目のように張りめぐらされたルール」が連歌の特徴であると書いた際に、茶の湯を連想した読者があったかもしれない。これも偶然の一致ではなく、十四世紀半ばに連歌新式によって完成した連歌のシステムをほぼ二百年遅れで茶の湯が受け継いだと考えてよいだろう。初期の有力茶人はみな連歌師ないし連歌の数寄者であったのだから。

だが、こうして、素材に基づく連歌のルールを再建し、これに従って宗祇たちの連歌を読み解いていると、どうも、これだけでは不十分であるという気持ちが強まってくる。また、多方面から「このルールに従って連歌を作ってみました。見てください」と持って来られる現代の連歌作品を読ませてもらうと、それは宗祇の連歌とは遠くはなれた、まるで別物という印象を受ける。もちろん古典の造詣の不足とか、古語への熟達が足りないという要素は仕方がない。しかし、これらを割り引いたとしても、やはり圧倒的に、現代の連

図4　水無瀬三吟　初折

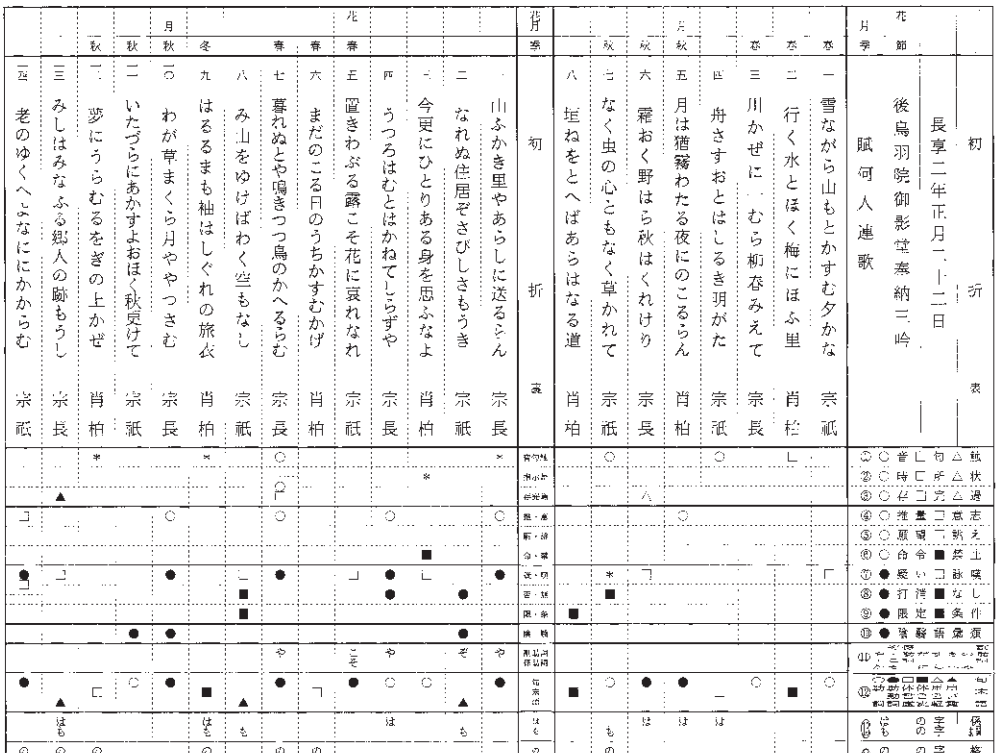
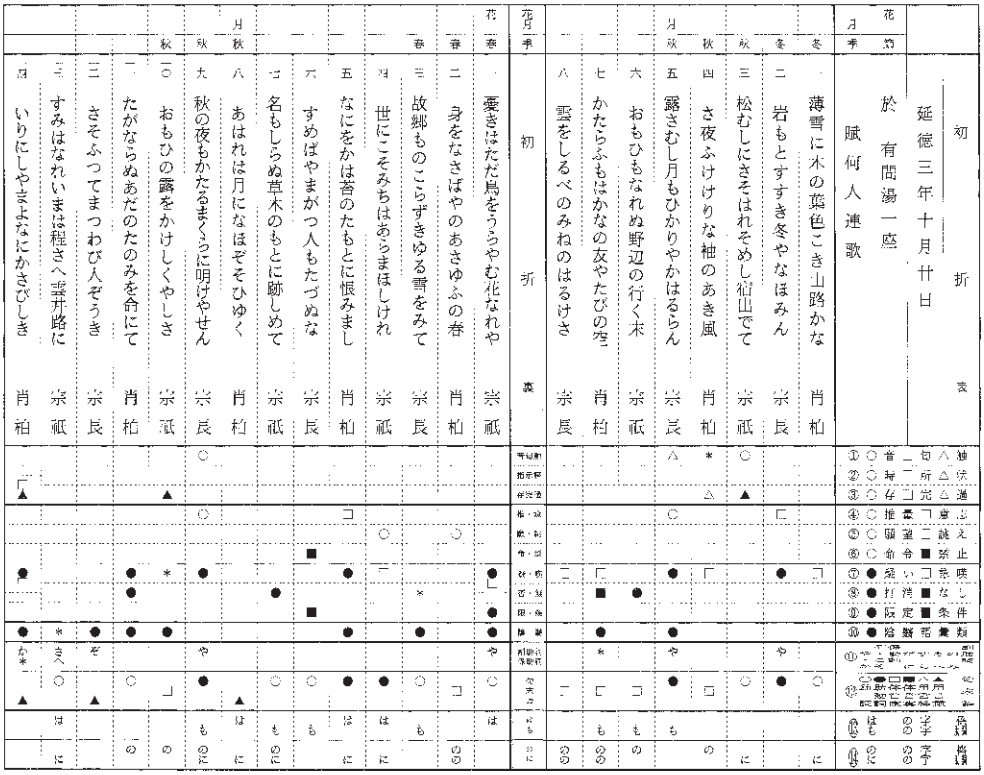


図5　湯山三吟　初折



歌は宗祇の連歌とは「別物」なのである。似ても似つかない、という印象さえ受ける。これは、何故なのだろうか。

あるとき、現代の連歌には、「疑いの表現」や「打消（否定）の表現」が極めて稀にしか現れないことに私は気づいた。連歌は対話で進行するはずなのだが、現代の日本人は、相手の言うことに疑問や否定を表明することが苦手で、相手の話の腰を折ることを避けようとする傾向が強い。Aの作者の主張にBの作者の主張が重ねられ、そのどれもが、ぶつかることも噛み合うこともないままに、言いっぱなしで先へ進んでゆくという現象がおこる。宗祇の連歌では疑いや打消の表現が極めて多く、これによって対話が深められて次の世界が見えてくるという構造になっている。両者は、根本の精神が異なっている。

句材（句を構成する素材）分析だけではだめである。句法（句の仕立て方）の分析も併用しなければならない。このように考えて、宗祇連歌に特徴的と思われる次の句法を抜き出して項目化した。【○推量□意志】【○願望□誂え】【○命令■禁止】【●疑い□詠嘆】【●打消■なし】【●限定■条件】。○□は「陽」、●■は「陰」を示す色分けである。さらに、「憂し、辛し」などを【陰影語彙】として項目化した。陰影語彙は宗祇連歌では頻出する要素なのであるが、現代の作品では出現が稀である。この他に、A【○音□句△触】の五感、B【○時□所△状】の指示語、C【○存続□完了△過去】の

時制をチェックすることが有効であろう（図4、図5）。過去の助動詞の「き」は、恋・述懐、そして季移りの場合にしか用いられていない。重い助動詞である。これのみ▲で表記しておく。

句の仕立て方の違いには、この他にも、助詞の分析から迫る方法がある。第一に、格助詞「の・に」と係助詞「は・も」の対立である。格助詞「の・に」を多用すれば、句は描写的となり、冷静な語りの調子に近づく。これに対して係助詞「は・も」を多用すれば、句は主情的となる。宗祇連歌では両者の比は六対四前後であるが、現代の連歌では、ほぼ九対一前後である。また係助詞【や・か・ぞ・こそ】、副助詞【だに・すら・さへ・のみ・など・ばかり・し】も主情性を強める語彙である。これも宗祇連歌では多用され、現代連歌では使用が稀である。

連歌作品を見るかぎり、現代の人間は、宗祇たちにくらべて対話の能力に欠けている。しかし、たとえば、芸能の漫才では、「なんでやねん」（疑問）、「そんなあほな」（打消）、「そんならナニか」（条件）などの受け方が多用されることによって、うまく転がり、話がふくらんでゆく。対話の方法論はまだ生きていて、それが現代の人間を楽しませることにはなお有効であるのだが、文芸という意識でかしこまってしまうと口頭にのぼらなくなってしまう。

以上のような、句材、句法の分析を進めてゆけば、さまざまな興味深い事実が発見できる。それぞれ一つずつ紹介しよう。

雪　一　薄雪に木の葉色こき山路かな　肖柏
二　岩もとすすき冬やなほみん　宗長
三　松むしにさそはれそめし宿出でて　宗祇
四　さ夜ふけけりな袖のあき風　肖柏
露　五　露さむし月もひかりやかはるらん　宗長
六　おもひもなれぬ野辺の行く末　宗祇
七　かたらふもはかなの友やたびの空　肖柏
八　雲をしるべのみねのはるけさ　宗長
雲　一　憂きはただ鳥をうらやむ花なれや　宗祇
二　身をなさばやのあさゆふの春　肖柏
雪　三　故郷ものこらずきゆる雪をみて　宗長
四　世にこそみちはあらまほしけれ　宗祇
五　なにをかは苔のたもとに恨みまし　肖柏
六　すめばやまがつ人もたづぬな　宗長

湯山三吟の冒頭である。発句の素材は降物の「雪」。若い宗長の付句は、脇句をしのいだあとは「露」（降物）、「雲」（聳物）、「雪」（降物）。すべて「雨かんむり」の素材であることが見てとれる。これは発句の印象をいつまでも引きずっているので、未練のわざであ

る。緊張も解けていないのであろう。宗祇の、「世にこそみちはあらまほしけれ」には、ついにしびれをきらして宗長をたしなめているという気息もこもっていたのである。このあと、宗長は一喝を受けてみごとに立ち直っている。

表

一　薄雪に木の葉色こき山路かな　肖柏　□詠嘆
二　岩もとすすき冬やなほみん　宗長　●疑い
三　松むしにさそはれそめし宿出でて　宗祇　←
四　さ夜ふけけりな袖のあき風　肖柏　□詠嘆
五　露さむし月もひかりやかはるらん　宗長　●疑い
六　おもひもなれぬ野辺の行く末　宗祇　←
七　かたらふもはかなの友やたびの空　肖柏　□詠嘆
八　雲をしるべのみねのはるけさ　宗長　□詠嘆

裏

一　憂きはただ鳥をうらやむ花なれや　宗祇　●疑い
二　身をなさばやのあさゆふの春　肖柏　←
三　故郷ものこらずきゆる雪をみて　宗長　←
四　世にこそみちはあらまほしけれ　宗祇　□詠嘆
五　なにをかは苔のたもとに恨みまし　肖柏　●疑い
六　すめばやまがつ人もたづぬな　宗長　←
七　名もしらぬ草木のもとに跡しめて　宗祇　←
八　あはれは月になほぞそひゆく　肖柏　□詠嘆
九　秋の夜もかたるまくらに明けやせん　宗長　●疑い
十　おもひの露をかけしくやしさ　宗祇　□詠嘆
十一　たがならぬあだのたのみを命にて　肖柏　●疑い
十二　さそふつてまつわび人ぞうき　宗長　□詠嘆

同じく湯山三吟の冒頭二十句の展開である。「係り結び」などの強意表現を「詠嘆」のうちに入れて分析すると、疑いから詠嘆への四句セットを反復して気分を高揚させてゆくさまが見てとれよう。「疑いから詠嘆への螺旋回廊」を三周上昇したのち、九～十二の恋・述懐世界へ入ってゆく。ここに入ってしまえば、一転して「疑いと詠嘆」を交互に連打して、その昂揚を持続する展開である。

連歌の一句の留め方（句末表現）については、改めて考えなければならないことが多い。第一に、現代で「体言留め」と一括されるときの、その「体言」の多様さである。たとえば「こと」「とき」などの形式的体言、「声」「けはひ」などの手につかみえない「体

言」、そして「よろこび」「さびしさ」などの用言由来の「体言」――これらを、たとえば「鶯」「松」「家」などの純然たる体言（手につかみえるものと言ってもよい）と全く同一に扱うことは、宗祇の連歌を味わう上で、どうもしっくりこないのである。あくまで試行錯誤の途上の一つであることをお断りした上でのことだが、これらも二分して、前者を「体言の虚」として□を、そして後者を「体言の実」として■を、それぞれ区分して表示した方が実態に近いように思う。

さらに言えば、虚実のどちらともいいがたい、両者の中間の「体言」のグループがあるように感じられる。部立て（句材）の名でいうと、光物（日・月・星）、時分（朝・夕・夜）、聳物（雲・霧・霞）、降物（雨・雪・霰）に属する単語である。仮に「天上語」と名づけておくが、これらを更に別立てとする三分法が適切かもしれない。しかし、今は、「天上語」の類も「体言の虚」に含めて表示する。

句末語が用言である場合には、次のような点に注意する。句末が用言の連体形、已然形、命令形である場合、そこには十分な余情余韻が発生する。従って重い表現となる。

問題は、句末の活用形が終止形または連用形である場合である。この場合、その句中に係助詞または副助詞、あるいはこれに類する表現が含まれていれば、一句全体が主情的な表現となっているので句の終わり方にも一種の重さが生じてくる。従って、これら二つの場合には、句末語を▲で表記する。

しかし、句末の用言の活用形が終止形または連用形であり、しかもその句中に係助詞または副助詞、あるいはこれに類する表現のどれも含まない場合は、たとえて言えば、ナレーションがただ「終わります」「続きます」と言い放っているに過ぎず、あまりに軽い。おそらく、そのために忌避されたのであろう、水無瀬三吟、湯山三吟の二百句を通して、わずかに四例（宗祇一、肖柏〇、宗長三）しか使われない。解析シートでは、これを句末語△で表記してある。

最後に、「水無瀬三吟」（一四八八年）、「湯山三吟」（一四九一年）の両三吟と、これに先立つ二條良基晩年の名作「石山百韻」（一三八五年）、後年の明智光秀「愛宕山百韻」（一五八二年）の解析シートを付載しておく。宗祇連歌の特徴として見てきたことが百年ほど前の「石山百韻」において、既にどこまで芽をふいていたかが確認できる。そして百年ほど後の「愛宕山百韻」においては、「宗祇らしさ」がどれほど衰滅に向かっているかを確認できよう。そこでは、付句が前句を受ける、その受け方において、「疑い」や「打消」を伴うパターンが明らかに減っている。陰影語類の使用も乏しい。恋句になると、その表現、その句数ともに、そそくさと切り上げようとしている「恋下手」の印象もあらわである。

連歌における「近代」ないし「現代」は、もう、すぐそこに迫ってきていたのである。

図6―1

句太	句数	花月 季節	縦判	白韻懐紙	宗匠	執筆
3 (5)	2 2	①光物 ②時分	初	長享二年正月二十二日		
3 3	2 2	③聳物 ④降物	折	後鳥羽院御影堂奉納三吟		
5 5	3 3	⑤山類 ⑥水辺	表	賦何人連歌		
(5) (5)	2 2	⑦動物 ⑧植物				
2	2	⑨人				
5 5	3 2	⑩居所 ⑪衣裳				
5 (5)	3 2	⑫旅 ⑬名所				
5 5	5 3	⑭恋 ⑮述懐				
5 5	3 3	⑯神祇 ⑰釈教				

花月季	句	表裏	白韻懐紙	宗匠	執筆
夕	一	表	雪ながら山もとかすむ夕かな	宗祇	
聳降山	二		行く水とほく梅にほふ里	肖柏	
水 木 居	三		川かぜに一むら柳春みえて	宗長	
春	四		舟さすおとはしるき明がた	宗祇	
朝 水 木	五		月は猶霧わたる夜にのこるらん	肖柏	
月秋 光夜 聳	六		霜おく野はら秋はくれけり	宗長	
秋 降	七		なく虫の心ともなく草かれて	宗祇	
虫 草	八		垣ねをとへばあらはなる道	肖柏	
居					
山	一	裏	山ふかき里やあらしに送るらん	宗長	
居	二		なれぬ住居ぞさびしさもうき	宗祇	
述	三		今更にひとりある身を思ふなよ	肖柏	
人 述	四		うつろはむとはかねてしらずや	宗長	
花春 述	五		置きわぶる露こそ花に哀れなれ	宗祇	
春	六		まだのこる日のうちかすむかげ	肖柏	
夕	七		暮れぬとや鳴きつつ鳥のかへるらむ	宗長	
山	八		み山をゆけばわく空もなし	宗祇	
冬 降 衣	九		はるるまも袖はしぐれの旅衣	肖柏	
月秋 光夜 旅	一〇		わが草まくら月ややつさむ	宗長	
秋 夜 恋	一一		いたづらにあかすよおほく秋更けて	宗祇	
秋 夜 草	一二		夢にうらむるをぎの上かぜ	肖柏	
人 居 述	一三		みしはみなふる郷人の跡もうし	宗長	
	一四		老のゆくへよなににかからむ	宗祇	

句	表裏	①○音□句△触	②○時□所△状	③○存□完△過	④○推量□意志	⑤○願望□誘え	⑥○命令■禁止	⑦●疑い□詠嘆	⑧●打消■なし	⑨●限定■条件	⑩●陰翳語彙類	⑪	⑫	句末語	⑬	⑭	係助格助
一	表	□															
二		□															
三																	
四		○			○												
五																	
六				△													
七		○						*									
八									■	■							
九																	
一〇																	
一一																	
一二																	
一三																	
一四																	
一	裏																
二		□															
三			*														
四					○			□									
五																	
六																	
七		○			○			●				や		●			
八									■	■							
九		*												■			
一〇						○											
一一								●			●						
一二			*											□			
一三				▲				□						▲			
一四		□						●						●			
花春																	
春																	
光夕 聳																	
降																	
木																	
人																	
述																	
*								□				こそ		●			に
居																	
山												や		○	は		
居												ぞ		○		も	
述																	
人																	
述																	
春																	
夕												や		●			
鳥																	
春																	
冬 降																	
衣 旅																	
月秋 光夜 旅																	
秋 夜 恋																	
秋 夜 草																	
人 居 述																	
述																	
述																	
居																	
居																	
述																	
人																	
述																	
山																	
居																	
山																	
水																	
木																	
春																	
夕																	
聳降山																	
水 木 居																	
春																	
朝 水 木																	
月秋 光夜 聳																	
秋 降																	
虫 草																	
居																	

図6-2

百韻懐紙二

縦判

花月 季	物分 光時	物物 花鳥	物物 山水	物物 植物	編 人	面装 居衣	旅 所名	恋 秋述	雜 釈	二 折裏	句 首	指示	過 存	発	禁	嘆	雜	条	隠	副係	句	語	はも	のに
										一 君を置きてあかずもたれを思ふらむ													宗長	
										二 そのおもかげに似たるだになし			□				■	●		だに			肖柏	
										三 草木さへふるきみやこの恨みにて								●			▲		宗祇	
										四 身のうきやども名残こそあれ										こそ			宗長	
										五 たらちねの遠からぬ跡になぐさめよ					○		□				▲		肖柏	
									＊	六 月日のすゑやゆめにめぐらん							●			や	●		宗祇	
									＊	七 この庠をもろこし舟のかぎりにて											○		宗長	
							水			八 又むまれこぬ法をきかばや					○						○		肖柏	
							＊			九 逢ふまでと思ひの露のきえかへり								●			●		宗祇	
							＊			一〇 身をあきかぜも人だのめなり								●			▲		宗長	
						降				一一 松虫のなく音かひなきよもぎふに								●					肖柏	
										一二 しめゆふ山は月のみぞすむ								●		のみ	▲	は	宗祇	
										一三 鐘にわれただあらましのね覚めして		○						●			○		宗長	のに
										一四 いただきけりなよなよなの霜			○								■		肖柏	の

花月 季	物分 光時	物物 花鳥	物物 山水	物物 植物	編 人	面装 居衣	旅 所名	恋 秋述	雜 釈	一 折表	句 首	指示	過 存	発	禁	嘆	雜	条	隠	副係	句	語	はも	のに
										一 色もなきことの葉をだに哀しれ					○		＊	■		だに			肖柏	
										二 それも友なるゆふぐれの空			□								▲		宗祇	
										三 雲にけふ花散りはつる嶺こえて													宗長	
										四 きけばいまはの春のかりがね		○						■					肖柏	
										五 おぼろけの月かは人もまてしばし		○			○			●		かは			宗祇	
										六 かりねの露の秋のあけぼの											□		宗長	
										七 すゑ野なる甲ははるかに霧たちて											○		肖柏	
										八 ふきくる風は衣うつこゑ		○									□	は	宗祇	
										九 さゆる口も身は袖うすき暮ごとに		△									○		宗長	はも
										一〇 たのむもはかなつま木とる山							□						肖柏	に
										一一 さりともの此世のみちは尽きはてて													宗祇	
										一二 こころぼそしやいづちゆかまし			△			□		●					宗長	
										一三 命のみ待つことにするきぬぎぬに													肖柏	の
										一四 猶なになれや人の恋しき													宗祇	

図6―3

花月	季	物分	光時	物物	降降	物物	山水	地辺	物物	植動	人倫	面装	居衣	旅所	名名	恋情	述述	風景	神仏	釈釈	縦判	百韻懐紙三	年月日於	句	指示	存通	推音	願願	命禁	疑嘆	否無	験条	陰陽	副係	句不語	連歌	はもの
花	冬					水	鳥				人									釈		二	冬がれのあしたづわびてたてる江に	宗祇									●			○	のに
月	冬					水					人									釈		二	夕しほかぜのとほつふな人	肖柏													
花	春		脇										居									三	ゆくへなき霞やいづくはてならむ	宗長				○		●	■					●	の
春	春						山															四	くるかた見えぬ山ざとのはる	宗祇							●					□	
花	春																					五	しげみよりたえだえのこる花おちて	肖柏									●				
花	秋				降																	六	木のしたわくるみちの露けさ	宗長						□							
月	秋		光夜										衣							釈		七	秋はなどもらぬいはやも時雨るらん	宗祇		*		○		●	●						の
秋	秋				降								*									八	苔のたもとに月はなれけり	肖柏			△			□							に
	秋										人									釈		九	心あるかぎりぞしるき世捨人	宗長								*					
	秋					水																一〇	をさまる浪に舟いづるみゆ	宗祇													
	秋		時節																			一一	朝なぎの空にあとなき夜の雲	肖柏							■						
	冬				降		山															一二	雪にさやけきよものとほ山	宗長		*											
	冬						山		木				居									一三	嶺のいほ木のはののちも住みあかで	宗祇							●						
									木													一四	さびしさならふまつかぜのこゑ	肖柏	○												
月	秋		光夜								人									釈		一	たれかこの暁おきをかさねまし	宗長													
	秋				降								衣									二	月はしるやの旅ぞかなしき	宗祇													
	秋													旅								三	露ふかみ霜さへしほる秋の袖	肖柏													
	秋								草													四	うす花すすきちらまくもをし	宗長				○		□							
	秋		*夕				山															五	鶉なくかた山くれてさむき日に	宗祇			△										
													居				述					六	野となる甲もわびつつぞすむ	肖柏													
											人					恋						七	帰りこばまちしおもひを人やみん	宗長			▲				■			●	ぞ	や	
																恋						八	うときもたれかこころなるべき	宗祇				○		●	●		●	●	か		
											人					恋						九	むかしよりただあやにくの恋の道	肖柏													
																恋						一〇	わすられがたき世さへうらめし	宗長							●		●	●	さへ		
					*						人											一一	山がつになど春秋のしらるらん	宗祇				○		●							
																						一二	うゑぬ草葉のしげき柴の戸	肖柏						●							
	春								草													一三	かたはらに垣ほのあら田返しすて	宗長		*	△										
	春												居									一四	ゆく人かすむ雨のくれかた	宗祇	*												の
	春		夕霧降											*																							

図6-4

縦判 百韻懐紙四 年月日於

花月季	物分光時	物物発降	地述山水	物物動静	人倫	居宅衣	旅所名	恋	述	神祇釈	名残折表		句指示	句指示存通	推意	勧誘	命止	疑問	否定	限条	陪聞	副係	句未語	連歌はも	連歌のに
春											一	やどりせむ野を鶯やいとふらむ	宗長	○							●	や			
											二	さよもしづかにさくらさくかげ	肖柏	＊											
											三	灯をそむくる花に明けそめて	宗祇	＊		□										
											四	たが手枕にゆめはみえけん	宗長		▲	○		●								
											五	契りはやおもひたえつつ年もへぬ	肖柏		□	○		□				●				
											六	いまはのよはひ山もたづねじ	宗祇			□		●				●				
											七	かくす身を人はなきにもなしつらん	宗長			□		■				●				
											八	さても憂き世にかかる玉のを	肖柏		△					＊		●				
											九	松の葉をただ朝ゆふのけぶりにて	宗祇								●					
											一〇	浦わのさとはいかにすむ覧	宗長					●								
秋夜			水			居					一一	秋風のあら磯まくら臥しわびぬ	肖柏	＊		□						●				
											一二	雁なく山の月ふくる空	宗祇	○												
月秋光夜			山鳥								一三	小萩原うつろふ露もあすやみむ	宗長			○		●				●				
	＊降			草	人			恋			一四	あだのおほ野をこころなる人	肖柏									●				
春	時賞	山		木		居		恋	述	釈	一五	忘るなよ限やかはる夢うつつ	宗祇									●	や			
											一六	おもへばいつをいにしへにせむ	宗長	○		□		●		■		＊		□		
											一七	ほとけたちかくれては又いづる世に	肖柏	＊												
春				木						釈	一八	かれしはやしもはる風ぞふく	宗祇		▲							●	ぞ			
時賞降		山									一九	山はけさいく霜夜にかかすむらん	宗長	○		○		●					か	●		に
賞						居					二〇	けぶりのどかに見ゆるかり庵	肖柏											■		
春					人						二一	いやしきも身ををさむるは有りつべし	宗祇	□										●	は	も
											二二	人にをしなべみちぞただしき	宗長											▲		に

句未語のうち□（体言連）とは、抽象概念を示す名詞。時間（朝夕）空間（上下）抽象語（静けさ）連用形名詞（ささやき）など。△（用言墓）とは、終止形・連用形の用言止めのうち、副助詞・係助詞を伴わないものを示す。

宗祇　二十四　肖柏　二十三　宗長　二十二

図7―1

縦判　百韻懐紙一　宗匠

花月季節	句数	句去	初折表	執筆
①光物	2	3	一 薄雪に木の葉色こき山路かな　肖柏	①○首□句△触
②時分	2	(5)	二 岩もとすすき冬やなほみん　宗長	②○時□所△状
③聳物	2	3	三 松むしにさそはれそめし宿出でて　宗祇	③○存□完△適
④降物	2	3	四 さ夜ふけけりな袖のあき風　肖柏	④○推量□意志
⑤山類	3	5	五 露さむし月もひかりやかはるらん　宗長	⑤○願望□詠え
⑥水辺	3	5	六 おもひもなれぬ野辺の行く末　宗祇	⑥○命令■禁止
⑦動物	2	(5)	七 かたらふもはかなの友やたびの空　肖柏	⑦●疑い□詠嘆
⑧植物	2	(5)	八 雲をしるべのみねのはるけさ　宗長	⑧●打消■なし
⑨人倫	2	2	於有間湯一座	⑨●限定■条件
⑩居所	3	5	賦何人連歌	⑩●陰駄語集類
⑪衣類	2	5	延徳二年十月廿日	⑪や・こそ・か・も 助詞 だ・て・し・を 助動詞 な・に・ん・へ・め 助動詞
⑫旅	3	5		⑫○●□■△▲ 助詞 助動 体言 体言 用言 用言 句末語
⑬名所	2	(5)		⑬はも 係助詞
⑭恋	5	5		⑭のに 格助詞
⑮述懐	3	5		
⑯神祇	3	5		
⑰釈教	3	5		

花月季節	句数	句去	初折裏	執筆
①光物	2	3	一 憂きはただ鳥をうらやむ花なれや　宗祇	①○首□句△触
②時分	2	(5)	二 身をなさばやのあさゆふの春　肖柏	②○時□所△状
③聳物	2	3	三 故郷ものこらずきゆる雪をみて　宗長	③○存□完△適
④降物	2	3	四 世にこそみちはあらまほしけれ　宗祇	④○推量□意志
⑤山類	3	5	五 なにをかは昔のたもとに恨みまし　肖柏	⑤○願望□詠え
⑥水辺	3	5	六 すめばやまがつ人もたづぬな　宗長	⑥○命令■禁止
⑦動物	2	(5)	七 名もしらぬ草木のもとに跡しめて　宗祇	⑦●疑い□詠嘆
⑧植物	2	(5)	八 あはれは月になほぞそひゆく　肖柏	⑧●打消■なし
⑨人倫	2	2	九 秋の夜もかたるまくらに明けやせん　宗長	⑨●限定■条件
⑩居所	3	5	一〇 おもひの露をかけしくやしさ　宗祇	⑩●陰駄語集類
⑪衣類	2	5	一一 たがならぬあだのたのみを命にて　肖柏	⑪や・こそ・か・も 助詞 だ・て・し・を 助動詞 な・に・ん・へ・め 助動詞
⑫旅	3	5	一二 さそふつてまつわび人ぞうき　宗長	⑫○●□■△▲ 助詞 助動 体言 体言 用言 用言 句末語
⑬名所	2	(5)	一三 すみはなれいまは程さへ雲井路に　宗祇	⑬はも 係助詞
⑭恋	5	5	一四 いりにしやまよなにかさびしき　肖柏	⑭のに 格助詞
⑮述懐	3	5		
⑯神祇	3	5		
⑰釈教	3	5		

図7-2　縦判　百韻懐紙　二

花月	季	光陰	音響	山水	植物	人倫	居所衣	旅名所	恋懐述	釈教	二折表		句音	指示	存通	推意	願願	命禁	景興	省略	関条	隠題	副係	句不語	はも	のに
											一折裏															
											一	わきてその色やはみゆる松の風	宗長	*												
	夏			水							二	いづみをきけばただ秋のこゑ	宗祇		○											
	夏	夜		虫			居				三	ほたるとぶ空に夜ぶかく端居して	肖柏													
		夜				人			恋		四	ものおもふたまやねんかたもなき	宗長				*		●	■						
									恋		五	枕さへしるとはしるなわがこころ	宗祇					■									
											六	なみだをだにもなぐさめにせん	肖柏				□										
							衣		哀		七	藤ごろもなごりおほくもけふぬぎて	宗長													
	秋			山					*		八	いでんもかなしあきのやまでら	宗祇						□				●			
	秋	夕		嶽							九	鹿のねを跡なるみねのゆふま葺	肖柏	○												
	秋	*	響								一〇	野分せし日のきりのあはれさ	宗長	*		▲			□							
	月秋	芒夕					居				一一	しづかなる鐘に月まつ里みえて	宗祇		○											
						人			恋		一二	ゆきてこころをみださんもうし	肖柏				○		□	■						
									恋		一三	われならでかよふや人も忍ぶらん	宗長							●						
									懐		一四	ふるきみやこのいにしへのみち	宗祇													
花月	季	光陰	音響	山水	植物	人倫	居所衣	旅名所	恋懐述	釈教	一折裏		句音	指示	存通	推意	願願	命禁	景興	省略	関条	隠題	副係	句不語	はも	のに
花春	春	*			木						一	さく花もおもはざらめや昏の夢	肖柏				○				●					
	春			山							二	桜といへばやま風ぞふく	宗長	*							●	■		ぞ	▲		の
	春	朝	霧								三	あさ露も猶のどかにてかすむ野に	宗祇													
	月秋	光夜				人			述		四	うちながむるもあぢきなの世や	肖柏						□	■				○	○	の
									述		五	深くるまで身のうき月をいみかねて	宗長							*	●					
	秋	夜							釈		六	今よりいとふながき夜の闇	宗祇		○											
	秋	夜		水							七	いさり火をみるもすさまじおきつ舟	肖柏	△					□				●	■	□	も
		夕									八	ゆふべのなみのあら磯のこゑ	宗長	○												―のの
					鳥						九	ほととぎすなのりそれとも誰わかん	宗祇	○			○	■			●				●	
	夏					人		旅			一〇	かへらんたびを人よわするな	肖柏				□									
				山			居				一一	ありぬやとこころみにすむ山甲に	宗長								●			や	○	に
											一二	ならはばしほれあらしもぞうき	宗祇					○				●		ぞ	▲	も
	冬										一三	つれなしや野は霜がれの忍草	肖柏									●		*	■	は
		降		草					恋		一四	いつかこころの松もしられし	宗長												▲	もの
		*							*																	

図7-3

縦判　百韻懐紙　三　　年　月　日　於　　張行　賦　連歌

三折表

句	本文	作者	季	分類
一	和歌の浦やいそがくれつつまよふ身に	宗祇		水・人・名・述
二	みちくるしほや人したふらむ	肖柏		水・人
三	すてらるるかたわれ小舟くちやらで	宗長		水
四	木のしたもみぢたづぬるもなし	宗祇	秋	木
五	露もはやおき侘ぶる庭のあきの暮	肖柏	秋	降・居
六	むしの音ほそし霜をまつころ	宗長	秋	降・虫
七	ねぬ夜半のこころもしらず月すみて	宗祇	秋（月）	光夜
八	あやにくなれやおもひたえばや	肖柏		恋
九	たのむ事あれば猶うき世間に	宗長		恋
一〇	老いてや人は身をやすくせん	宗祇		人・述
一一	こえじとの法もくるしき道にして	肖柏		＊
一二	雪ふむ駒のあし引のやま	宗長	冬	降・獣
一三	袖さえてよるはしぐれの朝戸出に	宗祇	冬	時・居衣・旅
一四	うらみがたしよ松かぜのこゑ	肖柏		木

三折裏

句	本文	作者	季	分類
一	花をのみおもへばかすむ月の本	宗長	春（花・月）	聳・木
二	藤さくころのたそがれの空	宗祇	春	夕・草
三	春ぞゆく心もえやはとめざらん	肖柏	春	
四	深山にのこるうぐひすのこゑ	宗長	春	山・鳥
五	うちつけの秋にさびしく霧立ちて	宗祇	秋	聳
六	けさや身にしむあまの河かぜ	肖柏	秋	＊・水・人
七	衣うつやどをかりふしおき別れ	宗長	秋	居衣・旅
八	夢はあとなき野辺の露けさ	宗祇	秋	夜・降
九	影しろき月をまくらのむら薄	肖柏	秋（月）	光夜・草
一〇	いつしか人になれつつもみん	宗長		人・恋
一一	遠近になりてあさまの夕けぶり	宗祇		夕・聳・山・名・恋
一二	きゆとも雲をそれとしらめや	肖柏		聳・＊＊
一三	はかなしやにしをこころの柴の庵	宗長		居・述
一四	身のふりぬまはなにおもひけん	宗祇		人・述

図7-4

月	季	光陰	聲音	山水	動植	人倫	居住	旅行	恋述	神祇	名残折表	句	指示	存在	推量	願望	命令	疑問	否定	限定	陰陽	副詞	句・文語	連歌	連歌
月	冬			水					述		一 見るめにも耳にもすさび遠ざかり 肖柏	*									●		▲	もも	に
	冬			*							二 冬のはやしに水こほるこゑ 宗長		○										□	は	に
	冬	夕	降	山	鳥						三 ゆふがらすねに行くやまは雪晴れて 宗祇													は	に
月	冬	光夜					居				四 鹿のうへの月のさむけさ 肖柏		*					□					□		の
		夜				人					五 たれとなく鐘におとして深くる夜に 宗長		○					● ■					○		に
						人					六 ふる人めきてうちぞしはぶく 宗祇		*								●		▲		
											七 蓬生やとふもたよりにかこつらん 肖柏				○			*			●	や	●	も	に
	夏				草						八 此のごろしげさまさるみち芝 宗長				○								■		*
	秋	光	降								九 あつき日は影よわる露のあき風に 宗祇		○										○	は	のに
	秋				虫				衣		一〇 衣手うすしひぐらしの声 肖柏		○										□		の
	秋	聲	山								一一 色かはるやまのしら雲うちなびき 宗長										●		△		の
				山	木						一二 をのへの松もこころみせけり 宗祇			△				□					●	も	
						人	居		恋		一三 たのめなほ契りし人を草の庵 肖柏			▲		○							■	の	
									恋		一四 うときはなにの床しげもある 宗長												▲	はも	の
月	春				鳥	人				名	一一 わりなしや名こその関のまへわたり 宗祇											ぞ			に
	春										二 たれよぶ子鳥なきてすぐらん 肖柏		○		○								●		
	春	*	聲		鳥						三 おもひたつ雲路にかすむ天津雁 宗長												■		
	花			山	木						四 さこそは花をあとのやまごえ 宗祇			△								こそ	□	は	の
	春					人			述		五 心をもそめにしものを桑門 肖柏			□ ▲				□					■	も	
							居				六 いでばかりなるやどりともなし 宗長							□	■	■	●		▲	も	
月	秋						居		述		七 露の問をうきふる里とおもふなよ 宗祇						■	□			●		○		の
	秋	降									八 一むらさめに月ぞいさよふ 肖柏	*									●	ぞ	▲		に

句・文語のうち□（体言類）とは、抽象概念を示す名詞。時間（朝夕）空間（上下）抽象語（静けさ）連用形名詞（ささやき）など。△（用言類）とは、終止形・連用形の用言・助動詞・係助詞を伴わないものを示す。

肖柏　三十四　宗長　三十三

宗祇　三十三

図8-1

百韻懐紙・縦判

宗匠

執筆

初折表

至徳二年十月十八日（一三八五年）

於石山寺倉坊張行

賦何船連歌

	句	作者
一	月は山風ぞしぐれにほの海	良基公
二	さざ波さむき夜こそふけぬれ	石山座主坊
三	松一木あらぬ落葉に色かへで	周阿
四	花のすぎてものこる秋草	通郷
五	露ながら野や初霜になりぬらん	師綱
六	きぬたのおとは遠里もなし	季尹朝臣
七	柴の庵あれたる庭に鹿鳴きて	千若丸
八	刈田の後の山ぞさびしき	右大弁宰相

初折裏

	句	作者
一	すててわがこころとや身をわするらん	任阿
二	猶さめがたき夢のよの中	忠頼
三	いづれさき花と老との化くらべ	良基公
四	松に桜のまじる木がくれ	恵覚
五	かすみては月の残るもすくなきに	頼冬
六	枕のかねのちかきあけぼの	長遠
七	わかれかねたがひにいとふ鳥鳴きて	周阿
八	又と契るもいさやかねごと	降崇
九	それまでの命もしらぬ恋の身に	石山座主坊
一〇	はてはけぶりもをしき玉づさ	良基公
一一	なほざりにうらみし比のしのばれて	通郷
一二	くもる山田におそきはつ雪	成阿
一三	風残る檜原は霜のよもおかじ	景賢
一四	松あるかたはいそぐ夕暮	周阿

図8-2　縦判　百韻懐紙　二

花月	季	物分	光時	物物	景降	物物	山水	物辺	動植	物物	植	衣居	旅名	恋	述	神釈	教	句番号	作者	句	指示	通存	推意	題識	命禁	疑嫌	否無	限条	陰陽	副係	句末語	はも	句
月秋	秋		光夜		降				草		人		名					一	降る雨のこよひを月にほしもせで	石山座主坊	○												のに
	秋					水			草		人							二	いなばの雲のちかき田上	良基公											■	のの
	秋					水												三	河音の波冷じき網代守	通郷	○△			○								の
						水												四	水の車や瀬をめぐるらん	右大弁				●							●	の
																		五	ながれ木はかけもさだめぬ橋かとよ	帥綱				●			□					
																		六	まづくれわたる浮雲の山	丁若丸												
																		七	残る日の入相をしき花をみて	良基公				○						●		の
	春																	八	にほひすくなき梅のうす雪	頼冬		□										の
	春																	九	春やまた朝束風吹きてさえぬらん	忠頼					○							
	春																	○	けふをはつねの里のうぐひす	仁阿	○											の
	春								草		人	衣	居		述			一	我はかく物うかる身の袖ぬれて	石山座主坊			○									の
月秋	秋		光夜											恋				二	ふたりみばやの手枕の月	帥綱					○								の
	秋																	三	こぬをなどさのみよさむのまたすらん	景賢	△			○			●					の
	秋													恋				四	夢に吹きけり風の荻原	成阿	*											のに
花月	季	物分	光時	物物	景降	物物	山水	物辺	動植	物物	植	衣居	旅名	恋	述	神釈	教	句番号	作者	句	指示	通存	推意	題識	命禁	疑嫌	否無	限条	陰陽	副係	句末語	はも	句

花月	季	物分	光時	物物	景降	物物	山水	物辺	動植	物物	植	衣居	旅名	恋	述	神釈	教	句番号	作者	句	指示	通存	推意	題識	命禁	疑嫌	否無	限条	陰陽	副係	句末語	はも	句
	秋																	一	道ほそき小野の下草うはがれて	任阿													●	の
																		二	しばし都のちかき近江路	良基公		○																	
											人							三	とはれては身にあまるまでうれしきに	石山座主坊														●					に
																		四	千世万代とちぎる行くすゑ	忠頼																			
																		五	松ばらに道のありける寺にきて	良基公																			のに
									木									六	おくの山なほふかきかくれ家	丁若丸				△															の
							山											七	捨てしより人のすむ世をいとふ身に	季尹朝臣														●					に
											人				述			八	かぎりはいつにすぐるあらまし	恵覚							●												に
																		九	村雲に村々月に晴れやらで	通郷																			
																		○	しぐれてのこる秋ぞすくなき	長遠																			
																		一	露よりも霜こそそむれ遅紅葉	良基公																			も
	秋				降				木									二	風を色との萩やちるらん	石山座主坊				○										●					の
	秋																	三	うす霧の夕の山を絵になして	千若丸																			ののに
																		一四	舟路いづくぞあとの遠しま	周阿																			の
花月	季	物分	光時	物物	景降	物物	山水	物辺	動植	物物	植	衣居	旅名	恋	述	神釈	教	句番号	作者	句	指示	通存	推意	題識	命禁	疑嫌	否無	限条	陰陽	副係	句末語	はも	句

図8―3

花月	季	光時	音降	山水	動植	人倫	居衣	旅名	恋述	神祇	縦判	白韻懐紙	年月日於	句	指示	存過	推量	願望	命禁	疑呼	否無	順条	陰陽	副係	句本語	連歌	はも	のに
	冬		降	水	鳥	*	居	旅				一	波よするいそぎはこえて降る雪に 石山座主坊															
	冬											二	鳴きたつちどり友やよぶらん 頼冬	○						●				や	●	○		に
	冬											三	やどごとの同じ名残もをしまれて 良基公															
	冬											四	夢のと絶えのはるをとめばや 周阿				○		○									
花	春	光夜	聳		木	人			述			五	花はなど我をおもはで散りぬらん 石山座主坊			□	○			●	●							
	春	夜										六	むかしはかすむ有明の月 忠頼										●					
	春							名				七	はやとけよ石井の氷志賀の山 良基公						○									
	春			山水						神		八	ふかきちかひは七の御社 任阿												■			
	冬					人				神		九	星うたふ神楽乙女の声々に 師綱	○										や	○			
	冬		降				*			神		一〇	庭火のあたり霜や消ゆらん 有大弁				○			●					●			
	冬				木					*		一一	榊葉のかれせぬ枝も風さえて 成阿	△							●							
	冬			山								一二	しるしの杉を三輪の山本 季尹朝臣															
	冬				木			名	旅	*		一三	旅は今日はつせまうでといそぐ日に 長遠		○													
	冬									*		一四	涙のこもる袖ぞしほるる 任阿											ぞ				
月	夏	光夜		山		人		名			折	三	とてもたつうき名をあふにかへもせで 良基公															
		*				*						二	いつはりまではたのみある山 成阿							●				や	●			
												一	おもへばや夢にも人のかよふらん 良基公				○											
						人						四	袂ぬれそふひとりねの月 千若丸															
		夜							恋			五	松風の秋しづかにてふくる夜に 季尹朝臣	○											○			
									恋			六	花までとせん草のかりいほ 周阿					□										
月	秋	光夜			木	人			恋			七	露の身はぬらさぬ袖によもならじ 良基公				○											
	秋						居					八	わすれはてねばうきも思ひ出 慮覚							●	●							
	秋				植							九	山かげはいかになるるもさびしくて 成阿							●	●		●					
	秋	夜										一〇	行くかたしらぬ谷の水音 周阿				○								○			
花	一											一一	苔をふみ松をつたへば道もなし 良基公							■	■				▲			
	一			山	植							一二	たれとすめとのおくの岩屋戸 忠頼				○			●					■			
	一											一三	みじか夜はやがて明石の月をみて 石山座主坊												○			
	夏		水									一四	時しらでなく水の鶏 良基公	○											■			

図8-4

百韻懐紙四

縦判　年月日於

花月季	光時	降山	山水	人倫	居衣	旅名	恋述	神祇	名残折表	句示指存	雅意題命	禁獄仏無	条限	賦	副係	句末語	連歌 はもの
									一 軒をゆくかけ樋や窓をたたくらん 成阿	○	○	●			や	●	
	夕霧	山							二 山をたえだえ見する夕雲 季尹朝臣							□	
		降山				名			三 なかばより下には消ゆる富士の雪 師綱							□	は のに
			草						四 草もはるかにもゆるむさし野 忠頼							■	も
			木			*			五 ちりもせぬ鎌倉桜はてしらで 良基公			● ●				○	も
						旅			六 春はすぐるにのこる東路 任阿							□	は に
						旅			七 行きくらす関より末やかすむらん 隆景			●			や		
			水		居	名			八 舟こぎよするすまの柴の戸 良基公							■	の
			水						九 浦人や又くみかぬる塩引きて 周阿			*			*	○	
				人					一〇 山なき沖を月や出づらん 師綱			●			や	●	
月	光夕	降			衣				一一 おく霜を袖にふかめてうき秋に 石山座主坊					●		○	に に
									一二 をばなをふけばよわる野嵐 景賢	○		■				□	
			草						一三 立つ声の跡にのこるやもろ鶉 師綱	○						■	の に
			鳥						一四 かたへばかりは初鷹の程 良基公							□	は の
花春	朝霧	山	木					*	一五 しらでなど心のこひにかかるらん 季尹朝臣							●	の に
							恋		一六 なみだみだるるけさの黒髪 忠頼	○						■	の
				人			恋		一七 うき人にあかぬ名残のいそがれて 石山座主坊			●		●		○	の に
							恋		一八 あふ時ばかり夜こそをしけれ 周阿					●		▲	ばかりこそ
		夜					恋		一九 むつごとにいかでうらみのまじるらん 師綱		○	●		●		●	の に
							恋		二〇 見てさますべき夢はおぼえず 成阿		○					●	は
	朝霧		木						二一 横雲をそのまま花に明けなして 良基公	△						○	に
								*	二二 又とちぎれば此の山のはる 右大弁	□		■				□	の の

良基公 十九 石山座主坊 十一 周阿 九 通郷 四 師綱 八 季尹朝臣 六 千若丸 五 右大弁三位 四

任阿 六 忠頼朝臣 七 忠覚 三 頼冬 三 長遠 三 隆景 二 成阿 七 景賢 三

句末語のうち□（体言類）とは、独立機能を示す名詞、時間（朝夕）や間（一十）、独立語（静けさ）、連用形名詞（ささやき）など。△（用言類）とは、終止形・連用形の用言止めのうち、副助詞・係助詞を伴わないものを示す。

図9−1

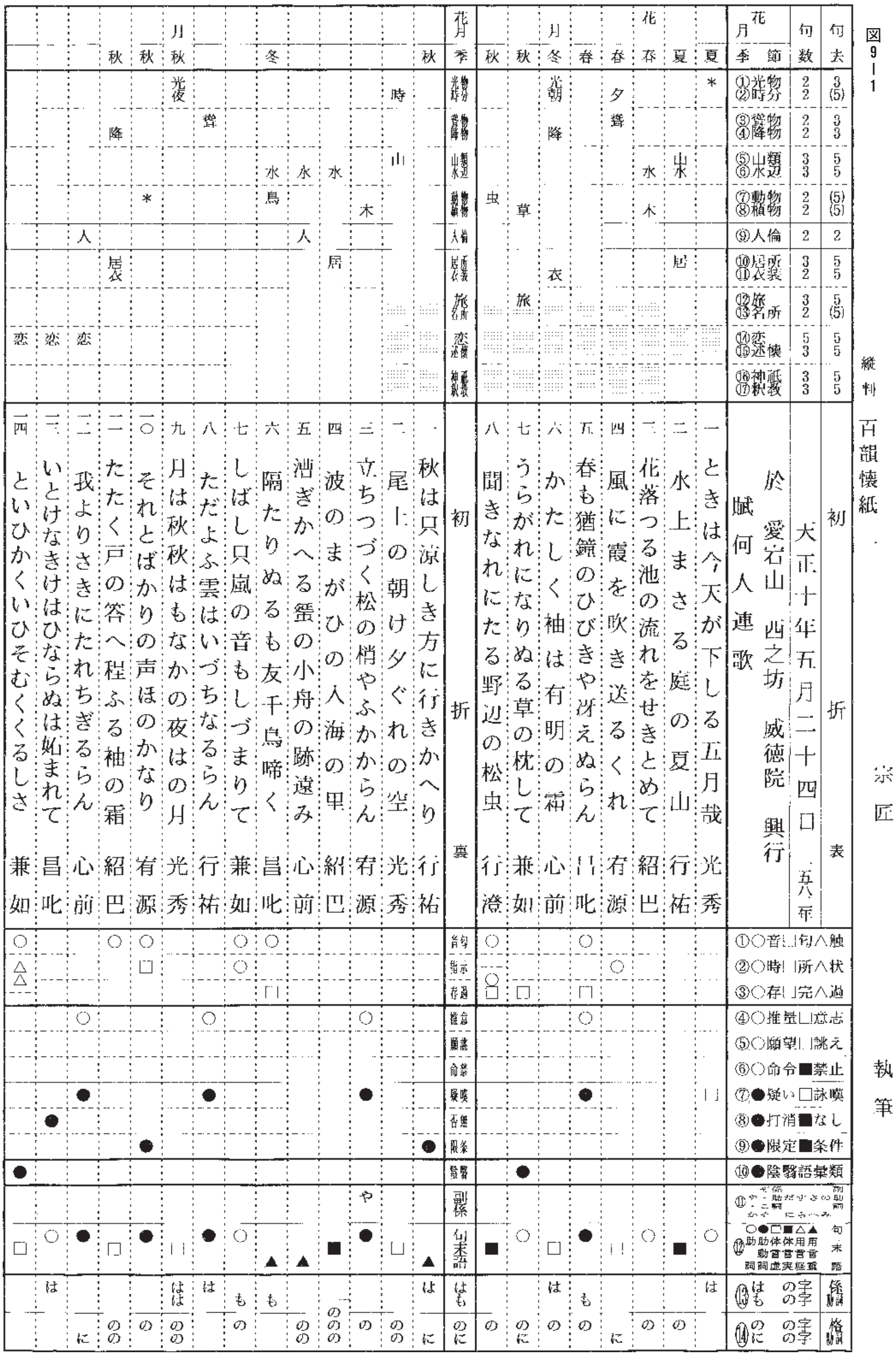

百韻懐紙・宗匠・執筆
縦判
於 愛宕山 西之坊 威徳院 興行
賦何人連歌
天正十年五月二十四日（一五八二年）
初折 表
一 ときは今天が下しる五月哉 光秀
二 水上まさる庭の夏山 行祐
三 花落つる池の流れをせきとめて 紹巴
四 風に霞を吹き送るくれ 宥源
五 春も猶鐘のひびきや冴えぬらん 昌叱
六 かたしく袖は有明の霜 心前
七 うらがれになりぬる草の枕して 兼如
八 聞きなれにたる野辺の松虫 行澄
初折 裏
一 秋は只涼しき方に行きかへり 行祐
二 尾上の朝け夕ぐれの空 光秀
三 立ちつづく松の梢やふかからん 宥源
四 波のまがひの入海の里 紹巴
五 漕ぎかへる蜑の小舟の跡遠み 心前
六 隔たりぬるも友千鳥啼く 昌叱
七 しばし只嵐の音もしづまりて 兼如
八 ただよふ雲はいづちなるらん 行祐
九 月は秋秋はもなかの夜はの月 光秀
一〇 それとばかりの声ほのかなり 宥源
一一 たたく戸の答へ程ふる袖の霜 紹巴
一二 我よりさきにたれちぎるらん 心前
一三 いとけなきけはひならぬは妬まれて 昌叱
一四 といひかくいひそむくくるしさ 兼如
句去 句数 季節
①光物 ②時分 ③聳物 ④降物 ⑤山類 ⑥水辺 ⑦動物 ⑧植物 ⑨人倫 ⑩居所 ⑪衣裳 ⑫旅 ⑬名所 ⑭恋 ⑮述懐 ⑯神祇 ⑰釈教
①○音‖句∧触 ②○時‖所∧状 ③○存‖完∧過
④○推量‖意志 ⑤○願望‖誂え ⑥○命令■禁止 ⑦●疑い□詠嘆 ⑧●打消■なし ⑨●限定■条件
⑩●陰騒語彙類
句末語
⑬はもの字 係助
⑭のにの字 格助

図9-2

縦判 百韻懐紙一

花月	季	物分光	物時降	物類遊	物類植	人倍	居所衣	旅宿名	恋述	釈	二折表	句	音	指示	存	推	題	命	疑	否	限	隙	副係	句	本語	はもの
秋											一 度々の化の情けはなにかせん	行祐				□			●				か	●		の
											二 たのみがたきは猶後の親	紹巴								*	■				は	の
						人			*		三 泊瀬路やおもはぬ方にいざなはれ	心前							○	●			●			に
	夏		山	鳥				名		*	四 深く尋ぬる山ほととぎす	光秀	○								■			○			のに
			山		水		居				五 谷の戸に草の庵をしめ置きて	宥源															
											六 薪も水も絶えやらぬ陰	昌叱								●							もも
				木							七 松が枝の朽ちそひにたる岩伝ひ	兼如				○ □											の
										釈	八 あらためかこふ奥の古寺	心前									■			○			の
								名			九 春日野やあたりも広き道にして	紹巴								○							も
											一〇 うらめづらしき衣手の月	行祐															
							衣				一一 葛のはのみだるる露や玉ならん	光秀					○			●				●			の
	秋				植						一二 たわわになびくいと萩の色	紹巴									■			○			
	秋			草							一三 秋風もしらぬ夕やぬる胡蝶	昌叱				□				●							の
	秋										一四 みぎりも深く霧をこめたる	兼如	○														も
	夏		山	水	草						一一 度々の化の情けはなにかせん	行祐															
											二 たのみがたきは猶後の親	紹巴								*	■				は	の
											三 泊瀬路やおもはぬ方にいざなはれ	心前							○	●			●			に
											四 深く尋ぬる山ほととぎす	光秀	○								■			○			のに
											五 谷の戸に草の庵をしめ置きて	宥源															
											六 薪も水も絶えやらぬ陰	昌叱								●							もも
											七 松が枝の朽ちそひにたる岩伝ひ	兼如				○ □											の
											八 あらためかこふ奥の古寺	心前									■			○			の
											九 春日野やあたりも広き道にして	紹巴								○							も
											一〇 うらめづらしき衣手の月	行祐															
											一一 葛のはのみだるる露や玉ならん	光秀					○			●				●			の
											一二 たわわになびくいと萩の色	紹巴									■			○			
											一三 秋風もしらぬ夕やぬる胡蝶	昌叱				□				●							の
											一四 みぎりも深く霧をこめたる	兼如	○														も
											一一 呉竹の泡雪ながら片よりて	紹巴															
											二 岩ねをひたす波の薄氷	昌叱															
											三 鴛鴦や下りゐて羽をかはすらん	心前					○										
	夏		山	水	草						四 みだれふしたる菖蒲菅原	光秀				○					■			○			
											五 山風の吹きそふ音はたえやらで	紹巴								●							
											六 とぢはてにたる仆ゐ寂しも	宥源				○ □											
											七 とふ人もくれぬるままに立ちかへり	兼如															
											八 心のうちに合ふやうらなひ	紹巴									■		や	○			
											九 はかなきも頼みかけたる夢語り	昌叱				○											
											一〇 おもひに永き夜は明石がた	光秀									■				は	に	も
											一一 舟は只月にぞ浮かぶ波の上	宥源								●			ぞ	□			
											一二 所々にちる柳陰	心前															
											一三 秋の色を花の春迄移しきて	光秀												○			に
											一四 山は水無瀬の霞たつくれ	昌叱	○														の

図9―3

花月	季	物分	光時	光降	物降	山水	辺地	動物	植物	人倫	居住衣	旅宿名	恋情述	神祇釈	句	音	指示	存通	推量	願望	命令	疑問	否定	願条	陰陽	別係	句末語	連歌	縦判	百韻懐紙 二	年月日於	張行	賦
	春			降												○			○								●			一 下解くる雪の雫の音すなり 心前	二 折 表			
											屋																○			二 猶も折りたく柴の屋の内 兼如			
			夜								衣		恋					▲	○								▲			三 しほれしを重ね侘びたる小夜衣 紹巴			
										人			恋					○	○											四 おもひなれたる妻もへだつる 光秀			
													恋						○											五 浅からぬ文も数々よみぬらし 行祐			
														釈		○														六 とけるも法は聞きうるにこそ 昌叱			
										＊																				七 賢きは時を待ちつつ出づる世に 兼如			
							水												△			○								八 心ありけり釣のいとなみ 光秀			
							水																							九 行く行くも浜辺づたひの霧晴れて 宥源			
		光夜				水																								一〇 筋白し月の川水 紹巴			
	秋						山					名																		一一 紅葉ばを分くる龍田の峰嵐 昌叱			
	秋			夕				鹿								○														一二 夕さびしき小雄鹿の声 心前			
											居																			一三 里遠き庵も哀れに住み馴れて 紹巴			
										人								▲						□			●			一四 捨てしうき身もほだしこそあれ 行祐			
	月																													一 みどり子の生ひ立つ末を思ひやり 心前	三 折 裏		
	秋		夜										述																	二 猶永かれの命ならずや 昌叱			
												＊													●					三 契り只かけつつ恃める盃に 宥源			
								山				名		神																四 わかれてこそはあふ坂の関 紹巴			
														旅											○					五 旅なるをけふはあすはの神もしれ 光秀			
	秋					草				人																				六 ひとりながむる浅茅生の月 兼如			
	秋		夜			水																								七 爰かしこ流るる水の冷やかに 行祐			
	秋		夕					虫																	○					八 秋の蛍やくれいそぐらん 心前			
	秋				降																									九 急雨の跡よりも猶霧降りて 紹巴			
	秋																													一〇 露はらひつつ人のかへるさ 宥源			
	春				降					人																				一一 宿とする木陰も花の散り尽くし 昌叱			
	春					木				＊																				一二 朝霞薄きがうへに重なりて 光秀			
	春					山																								一三 山より山にうつる鶯 紹巴			
		朝				烏																								一四 引きすてられし横雲の空 心前			
		聳																															

図9-4

月	季	物名	光景	発想	物名	出来事	動作	植物	人倫	居所	衣服	恋	旅	述懐	神祇	釈教	名残折	裏	句数	指示	存疑	推定	意識	願望	命令	疑問	否定	反実	陪聴	副詞	句末語	連歌	縦判
																	一 出でぬれど波風かはるとまり船	兼如			□						■	●		■		
	冬				降	水											二 めぐる時雨の遠き浦々	昌叱	＊														
	冬	光夕				水草											三 むら蘆の葉隠れ寒き入日影	心前	△														
	秋						鳥										四 たちさわぎては鳴の羽がき	光秀	○														
	秋							人									五 行く人もあらぬ田の面の秋過ぎて	紹巴								●							
	秋				降												六 かたぶくままの苫茨の露	宥源															
月	秋	光夜									衣						七 月みっつうちもやあかす麻衣	昌叱	○		○				●						○		
											衣	恋					八 寝もせぬ袖のよはの休らひ	行祐								●							
										夜		恋					九 しづまらば更けてこんとの契りにて	光秀	○					■									
									居								一〇 あまたの門を中の通ひ路	兼如															
						水竹											一一 埋みつる竹はかけ樋の水の音	紹巴	○														
								植									一二 石間の苔はいづくなるらん	心前					○			●							
																	一三 みづ垣は千代も経ぬべきとばかりに	行祐		□				●									
															神		一四 翁さびたる袖の白木綿	昌叱	○		□												
花月	季	物名	光景	発想	物名	出来事	動作	植物	人倫	居所	衣服	恋	旅	述懐	神祇	釈教	名残折	裏	句数	指示	存疑	推定	意識	願望	命令	疑問	否定	反実	陪聴	副詞	句末語	連歌	縦判
	冬		夜		降										神		一 明くる迄霜よの神楽さやかにて	兼如	○														
																	二 とりどりにしもうたふ声添ふ	紹巴	○														
										居							三 はるばると里の前田を植ゑわたし	宥源															
																	四 縄手の行衛ただちとはしれ	光秀							○								
							獣										五 いさむればいさむるままの馬の上	昌叱									●	■					
								＊									六 うちみえつつもつるる伴ひ	行祐			○												
	花春							木									七 色も香も酔をすすむる花の木	心前	○	□													
	春																八 国々は猶のどかなるころ	光慶															

句末語のうち□（体言止め）とは、抽象概念を示す名詞、時間（朝夕）空間（上下）抽象語（静けさ）連用形名詞（さきもき）など。△（用言止め）とは、終止形・連用形の用言止めのうち、副助詞・係助詞を伴わないものを示す。

光秀	十五	行祐	十一
紹巴	十八	宥源	十一
昌叱	十六	心前	十五
兼如	十二	行澄	一
光慶	一		